
虚無<ゼロ>の翼

mid-arc

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚無>ゼロ<の翼

【Nコード】

N2292T

【作者名】

mid-arc

【あらすじ】

【あらすじ】恒例の使い魔召喚の儀式を控えてルイズはため息をついていた。幼き頃、呪文の失敗によって新世界（魔法世界）へ飛ばされ紅き翼と旅をしてきた少女は心身ともに成長しハルケギニアへもどってきていた

【趣旨】もし、ルイズがネギまの魔法世界に飛ばされた経験があるならというIFストーリーです。

【注】この作品は、Arcadia様の方に投稿している作品の外伝として思いついたのが始まりです。第1話は向こうの方にほぼ似

た内容が上がっていますが、向こうの作品と別の流れで作って行きます。ルイズの強さや精神面といった能力は原作から見るとやや魔改造気味ているのでご注意ください。

第1話 桃髪の撲殺天使（2011・10・18再改訂）（前書き）

2011/06/23改訂

2011・10・18再改訂

第1話 桃髪の撲殺天使（2011・10・18再改訂）

さて、世の中には古今東西様々な物語が存在している。

ここでは、ある一つの物語を紹介しよう。

物語の舞台は、とある世界に存在する数千年にも長き間中世が続くハルケギニア。

そこには時代の荒波に立ち向かう運命に一人の少女がいた。

しかし、彼女は本来の流れとは異なり、別の世界に飛ばされ仲間と共に世界を相手にした経験を持っていた。

この少女と彼女の使い魔が織り成す新たな英雄談のプロローグを今迎えようとしていた

ハルケギニア地方、トリステイン王国に存在する唯一の魔法学院、トリステイン魔法学院。ここではトリステイン全土から貴族の子弟達が集う全寮制の学校である。

時期はハルケギニアの暦でフェオの月（4月）、第2学年へ進級を控えた少年少女たちは学院の一角にある広場に集まっていた。

「退屈だわ」

ため息をつきながら不満を漏らす少女の名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。彼女はトリステイン王国ヴァリエール公爵家の三女でハルケギニアでも有数の貴族の娘

である。小柄な体形で桃色の髪を持つているがある部分にコンプレックスを感じている。今彼女の眼の前で行われているのは進級に関わる使い魔の儀式。彼女はその儀式を目前に控えていて先に使い魔を召喚した同級生を見渡している。

「せっかくだから面白いことにならないかしら？例えば、ワイバーンとかエルフとか召喚されたりして」

先に順番を迎え儀式に成功した者たちが召喚したカエルやモグラのような代わり映えのしない使い魔達を目の前にして、彼女は頭の中で他の人達から見ると危険な思考をしていた。最もワイバーンの召喚に成功した時点でこの場は混沌とした状況に追い込まれてしまふのは間違いないだろう。ましては、このハルケギニアにおいて敵対視されているエルフが召喚された時点で教会や王家を巻き込んだ大騒動に発展するのは間違いない。

彼女の名誉のために一応断りを述べておくが、彼女は決して愉快犯のようにこの場を恐怖と混乱で覆い尽くそうとするのが大好きな残虐非道な性格の持ち主ではない。むしろ、私欲にまみれている数多くの一般貴族たちよりも断然まともな性格を持っている。

ただし、このハルケギニアに済む一般の人々たちでは到底体感出来無いことを実際に経験した彼女の常識は周りの者と離れすぎている。肉体言語でお話することが多かった者たちの影響を受けているのである、やりごたえのあるものに植えているのである、諦めるしか無い。

「何物騒なことを考えているのよ、ルイズ。」

突然後ろから声をかけられたルイズは後ろを振り返り、そこにいた少女に話しかけた。

「キュルケ？なんで私の考えがわかるのよ！」

彼女の名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。トリステイン王国の東の隣国であるゲルマニア帝国ツエルプストー家の令嬢である。赤い瞳と褐色の肌を持ちルイズとは対照的な美しいプロモーションを持つ少女であり、この

学園に在学する数多くの男子学生を虜にしている。

ルイズから理由を聞かれて、キュルケは呆れたようにその答えを話した。

「あなた、声に出していたわよ。」

「うっ」

キュルケから指摘を受けてルイズは言葉に詰まった。だが、彼女は自分自身を正当化するようにこう付け加えた。

「ただこうも平凡だと退屈で仕方が無いのよ。」

ルイズの言い訳を聞いて、キュルケはイタヅラ顔で言葉を続けた。「いつも貴方が話している「世界を相手にした物語（笑）」に比べると面白みがないのかしら？」

「（笑）って何よ！大体あんたから聞きたがっていたでしょう！」バカにされたかつときたルイズはいつものようにキュルケとのじやれ合いのような口論に発展した。

実はルイズとキュルケの実家同士は長年深い因縁を持つ間柄であり彼女たちも因縁を引き継ぐかのように言い争っているように見えるが、この二人は険悪な仲ではなく信頼できる悪友の間柄と言ったほうが正確であろう。もちろん今の会話も日常茶飯事であり彼女らは根に持っているわけではない。だが、素直な性格ではないルイズにこのこと尋ねたら間違いなく否定するに違いない。

一息ついて、キュルケはルイズにこう尋ねかけた。

「わかったわかったわ。それにしても何度聞いても想像のつかない話よね。」

ルイズから話を聞いた当初、一瞬なにの迷言を言っているかと思っただがルイズの性格と彼女が持つ知識や強さを実感している今は彼女のことを疑ってはいない。ルイズはキュルケの言葉を聞き懐かしむように言った。

「ええ。私も実際に経験しなかったら同じだったでしょうね。」

実際に体験した本人の言う言葉だけあって重みがある。それを聞き溜息をついてキュルケは述べた。

「ハルケギニアとは別の世界が存在するなんてね。到底世迷言にか聞こえないわよ。」

「まあ、そうなんだけど私が行った世界とこの世界を比較してみるとハルケギニアはかなり遅れているのよ。やっぱり誇り高い（笑）人たちのせいかしら？」

ルイズが口に出した言葉を聞きキュルケは顔をしかめた。何せハルケギニアではプリミル教が絶対の教義とされている。彼女らの実家からしても政敵は少なからず存在しており彼女の言葉は彼らから目をつけられる格好の材料になるのは間違いない。声を潜めてキュルケはルイズに話しかける。

「いつものことだけど今の言葉を私たち以外に聞かれたら危ないわよ。もし、ロマリアの神官の耳でも入ったら……」

「大丈夫大丈夫。そんなへまはしないわよ。今だって儀式に集中して誰も聞いてはないわよ。万が一、そんな事態になったとしても口マリアごと潰すから問題わよ。」

「問題よ！全く、そんな調子だから「トリステインの魔女」のような二つ名を付けられるのよ。」

ロマリアなんか目にしないというような調子のルイズを見てキュルケはルイズに付けられた二つ名を挙げた。だが、その二つ名を気にしないようにルイズはサラッと告げた。

「もう十分なほど異名を持っているから今更気にしないわよ。むしろ、「魔女」だなんて私にぴったりじゃない。」

齒に衣着せぬルイズの言動にキュルケはもう一人の友人に助けを求めてため息をついた。

「はあ どうにかならない？タバサ？」

「無理。」

尋ねられた彼女はいつものように本を読みながらキュルケの言葉に対して諦めたように返答していた。人間諦めが肝心である。

キュルケが助けを求めた友人の名前はタバサ。青い髪を持つ小柄な少女である。彼女はある秘密があるのだがこの3人の中では公然の秘密となっている。そしてその秘密を知りながらも変わらず友人付き合いを続ける2人に対してタバサは心の底では大切な友人と思っっている。

「どこかに私の心を動かすものがないかしら？ ippそのことチームを組んで旅に出てみたいわ。」

どこかの王のように話すルイズに対してキュルケは以前に聞いたある話を思い出した。

「ここでも以前話していたあのチームを組むわけ？ 確か名前は

「紅き翼。」そうそう。」

「それいいわね。なんなら入ってみる？」

「面白そうだけどいくら命があっても足りなさそうだね。あなたのことだから平気でサハラにでも行きそうだし。」

「同感。」

「当然じゃない！」

「」

いつもと変わらない彼女の様子に諦めながらも、彼女達は儀式の順番を迎えるまでとりとめのない話続けるのであった

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは
一見世の中のどこにでもいるような16歳の普通な少女に見える。

しかし、彼女の過去を振り返ってみるとハルケギニアの誰よりも波

瀾万丈な人生を送ってきたと言っても過言ではない。最も彼女の人生に影響を与えた出来事は、9歳の頃に見知らぬ異世界に飛ばされ4年間その世界で過ごした事であるのは間違い無いだろう。

ある日、実家の公爵邸にある広い練習用の庭でいつもと同じ様に魔法の練習を繰り返していたルイズはふと使い魔の召喚魔法であるサモン・サーヴァントを実行してみた。しかし、召喚魔法の鏡が出現したまでは良かったが、呪文を唱える段階で噛んでしまった影響か彼女は逆に鏡に引きずり込まれてしまった。そうして、彼女が飛ばされた先は旧世界、地球と対となす新世界、ハルケギニアとは異なる別の魔法世界だった。

彼女にとつて不運だったことは、出現した場所は魔法大戦中の戦場であった。迫り来る恐怖に怯えながら相手に向かつて必死になりながら彼女が失敗魔法と考えていた爆発魔法を振るいやってくるものを追い払っていた。しかし、幸運な事にその戦場には当時有名になりかけていたある集団がいて彼女は彼らと出会い保護された。

彼らの名は「紅き翼>アラルブラク」、ナギ・スプリングフィールドをリーダーとする最強のチームである。

彼女はハルケギニアとは違う世界に一人迷いこんでしまった事実を彼らから知り、寂しさはあったが紅き翼と交流しているうちに打ち解けて仲間となった。彼らからその世界の魔法を学び、剣術を学び、新旧両世界の学問を学び心身ともに成長していった。彼らも、物覚えのよいルイズに対しつつい自重せずに教え込んでしまい、その結果誕生したのは「桃髪の（撲殺）天使」ルイズであった。彼女は彼らと共に魔法世界の危機を救い一旦ハルケギニアに帰還する方法を見つけて3年前にハルケギニアに戻ってきたのである。

ちなみにルイズ失踪が発覚した当時、彼女の両親である公爵とその妻は何者かがルイズを誘拐したと考えて激怒し本気を出して犯人探しを行った。その結果、副次的にトリストインで不正を行っていた売国奴が大勢巻き込まれてある程度一掃された事はこの国にとつて幸運なことであつただろう。ただ、未だにしつぽを出さないもの

も存在しているが

（それにしても、自分の事ながらとんでもない人生を送っているわね）

ルイズは順番を待つ間、心のなかで苦笑しながらこれまでの人生を振り返っていた。

ハルケギニアに戻ってきてからは、旧世界・新世界で手に入れた知識や持参していた書籍を元に様々な分野に手を出した。

科学技術についてはこの学院に教鞭をとっているコルベール先生に協力を依頼し彼は蒸気機関を実用化させヴァリエール領内で試験的に蒸気機関を活用した工場を建設している。魔法技術に関してはアカデミーに勤める姉、エレオノールに協力してもらいトリステインで既存の系統魔法について今までとは別の角度から共同研究を進めている。

政治面についてはこの国の政治を一手に引き受けているマザリーニ枢機卿と交流を持ち彼と共に幼馴染であるアンリエッタ王女に帝王学や政治経済について教育、助言を行い彼女は数カ月前にトリステイン女王に即位しており、度々、彼女らの手を借りながらも積極的に政務に参加している。

身内では姉、カトレアの病気をルイズが調合したイクシールを投与して完治させた。また度々、ヴァリエール領では突風が吹き荒れるのは気のせいだ。

その他にも色々なことを良くも悪くも引き起こし彼女には「賢者」「悪女」「変人」など色々な二つ名があるが一番広く使われるのは「魔女」である。その理由は彼女のやるが大抵の人々には理解出来ないからである。彼女の名は、「トリステインの魔女」としてハルケギニア中で知られて、彼女の影響力を欲しがった諸外国から誘拐など命を狙われたことが数多くある。もちろん毎回必ず振り返り討ちに行っている。

ただ、彼女をよく知るものは彼女が何か急いで事をなそうということに薄々気がついていた。

（こうしているいろいろやってきて一応成果は上げているわ。でも、これだけやってもやり残したことはないっばいあるのよ。それに、何と少しでも再びあの世界に行かないといけないのだから　　）

そうこうしているうちにキュルケやタバサも無事使い魔を召喚し終えて、とうとうルイズの順番を迎えた。

彼女自身、今の現状を作り出した根本である魔法、サモン・サーヴァントを使うにあたって何も思うことがない訳ではない。ただ、相変わらずハルケギニアの系統魔法は爆発魔法となるが本来の歴史とは違い彼女のコモンマジックは爆発魔法にはならないのでサモン・サーヴァントも失敗することはないだろうと推測していた。ただ、召喚されるであろうものについて色々と思うところはあった。ルイズは、この世界に戻ってきてからいろいろな文献を調べてみたが自分の魔法は失われた系統ではないかと推測していた。もしかしたら自分の使い魔も

（うっん、あれこれ考えるのも無駄ね。）

これまでの思考を止め、真剣にスペルを間違えないようゆっくり

と丁寧なサモン・サーヴァントを唱える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召還せよ！」

呪文は成功し彼女の目の前に鏡が出現した。しばらくするとある少年が現れた。彼の容姿はハルケギニアでは見かけない黒目、黒髪を持ち主であった。この学園にいるメイドも同じような容姿ではあるが彼女には理由があり普通のハルケギニアにはある得ない特徴であった。そして、身につけている服、持ち物は

（えっ？　　これはひょっとして東洋系の旧世界人かしら？中国人、日本人、あるいは　　もしかしたら人間は出るかもしれないかなとは思っていたけどコレは予想外だわ。厄介ごとにならなければいいけど無理っぽいわね。）

想定外な事態にこれから先は色々と厄介事が起こるだろうとこれ迄の経験からルイズは思わずため息を付いた。彼女は取り敢えずは考え事は後回しにしようとして決めて彼に近づき話しかけた。

「貴方は誰？」

第1話 桃髪の撲殺天使（2011・10・18再改訂）（後書き）

月一で更新できたらいいなと思っています。

第2話 Welcome to Fantasy World(前書き)

今回は早く執筆できたので投稿してみました。

第2話 Welcome to Fantasy World

「貴方は誰？」

目の前の少女からそう尋ねられたとき彼の心は混乱していた。

魔法についての基礎知識のないこの少年は、帰宅途中に突然目の前に現れた鏡に触れてこの場に遭遇したため戸惑うのは当然のことだろう。周りの風景や人々に疑問を持ちながらも彼は取り敢えず質問に答えた。

「誰って。俺は平賀才人。」

「貴方は、ハルケギニアの人？」

「ハルケギニアって何？」

彼、平賀才人の返答で周りざわめく。「ハルケギニアを知らないってどこの平民だ？」、「流石、魔女だ！」などと色々好き勝手な嘲笑や罵倒などが行き交う。そんな中、才人に質問した少女、ルイズはため息をついていた。

（やっぱりハルケギニアを知らないかあ 東方、ロバ・アル・カイリエの人かそれとも ）

取り敢えず気を取り直し、ルイズは同じように混乱している才人に向かってもう一度ある質問をした。

「それじゃ、貴方は地球人？」

「何言っているんだ？そんなの当たり前だろ。正真正銘地球生まれの日本人だ！」

「（やっぱり！）そう、少し混乱しているからもう少しの間待って

「ちょうだい。」

予想通りな才人の回答を聞き、このまま見なかったことにしてベッドで寝てしまいたい気持ちを抑えつつルイズは思考を巡らす。彼女自身、召喚される使い魔は韻竜やエルフといった通常はありえないものが出るだろうと予期していたが旧世界人が現れるとは流石に予期していなかった。いや、そのことも頭をよぎっただろうが、過去に彼女自身が飛ばされた事例はただの事故だろうと思って除外していたのだ。

（あゝ！なんでこんなに面倒なことになるのよ！見た感じ魔法を知らない一般人みたいだし。旧世界で突然人が消えたら大騒ぎになるわよ！あゝもう、どうしたらいいか）

ルイズは突然の事態に上手い解決法が見いだせずにつろつろしている。才人の方は取り敢えず回るの様子を見ようと静観している。そうこうしているうちに騒ぎを聞きつけてある男が近寄ってきた。彼の名はコルベール、火の魔法を担当する教師である。

「どうしたのだね。ミス・ヴァリエール。早く使い魔の儀式を済ませなさい。」

「でも！人間を使い魔にするなど聞いたことがありません！」

「たしかに古今東西このような例は聞いたことはないが、呼び出した以上は彼は君の使い魔にならなければならない。それに、これは神聖な儀式なんだ例外は認められない。」

「（このままだとマズいわね　なんとか止めるようしないと）それでは、彼はマントや杖を持っていませんがもしちゃんと魔法の使える貴族のメイジだったらどういたしますか？」

「むっ。それは」

「あのー。俺は魔法なんて使えませんし貴族でも何でもない普通の

「一般庶民ですよ。」

「だそうだ、ミス・ヴァリエール。早く儀式を済ませなさい。」

「（こいつ！せっかく人がかばおうとしているのに余計なことをくす！）」

儀式を続行させようとするコルベルに對しルイズはなんとか中止させようとうまく誘導させようとしていたが、才人の余計な一言で台無しになってしまった。うまく進まないこの状態にストレスが限界になった彼女はついにキレた。

「（あゝもう！折角私が気を使おうとしたのに台無しにしてしまったからこいつの責任よね！うん、それなら続けても問題なよね！）わかりました。やります！」

テンションがおかしくなった彼女は杖を取り出し才人の前でルーンを唱え始めた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ。」

「な、何をする。」

「いいからじっとしていなさい！」

「は、はい！」

突然のルイズの行動に才人は戸惑ったがルイズはプレッシャーを掛け黙らせた数々の修羅場を乗り越えた彼女にとってコレくらいは朝飯前である。こうして、ルイズは無事使い魔の儀式であるキスを終わらせることができた。

（キスをしたけどナギと仮契約の時もやったしノーカンだよね！）

ただし、こんなことを考えていたのは彼女のみぞ知る。しばらくルイズは同級生から投げかけられる罵倒をいつものように軽くあしらっていた。

「ぐあああ！熱い！」

「しばらく待つていなさい。すぐに収まるわよ。」

「俺の体に何をしやがった！」

「説明しようとしたのに余計なことをしたんだから自己責任よ！自己責任！」

「なんだよ！」

才人は手に刻まれたルーンの痛みでしばらく苦しんだが時期に収まった。その後、コルベールが彼に刻まれたルーンを確認してこの場はお開きとなった。ルイズは才人とふたりつきりになりため息を付いた。彼女は冷静さを取り戻しひと通り説明しようとサイトの方を向いた。

「はあ 何も説明しないでいきなり儀式をやってしまつて悪かつたわね。」

サイトの方もルイズの態度を見て冷静さを取り戻して取り敢えずは現状を把握しようと問いかけた。

「聞きたいことが山ほどあるんだけどお前が答えてくれるんだよね？」

「ええ。その前に私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、ルイズと呼んで。立ち話もんだから私の部屋で話しましょう。でも、これだけは言っておくわ。」

「何だ？」

「ファンタジーの世界へようこそ。」

・
・
・
・
・

ルイズは才人を自分の部屋へと案内し地球出身の彼にも分かりやすいように使い魔召喚やハルケギニアについて一通り説明した。

「と言うことはここは異世界というわけか？」

「ええ、その通りよ。」

「信じられん。」

「当然でしょうね。私にもわかるわ。」

「あれ？でも、この世界に住んでいるルイズはどうしてそんなに地球について詳しくんだ？」

「それは、私は事故で貴方の世界に飛ばされたことがあるからよ。」
「なんだって！」

ルイズはそう切り出し、今度はルイズが新世界に飛ばされたことを語り始めた。魔法の失敗でいきなり戦場に飛ばされたこと、紅き翼のメンバーに助けられたこと、彼らに学び成長したこと、世界の存亡をかけた戦いに巻き込まれたこと、そして、このハルケギニアに帰ってきたこと。才人は話を聞いている間元の世界に魔法が存在したことなどにツッコミを入れていたが最後の話に一番食いついた。

「地球に帰れるのか！」

「理論上は可能よ。ただし、すぐには無理よ。」

「なんでだよ！ルイズだって戻ってきたんだろ？それなら。」

「私が帰ってきた時も数カ月準備期間と膨大な魔力が必要だったのよ。」

「そんな」

「私の魔法が原因だしここでの生活は保証するわ。魔法を使えないただの平民だと危ないし。それにしても、貴方は見たところ学生？」

「ああ。麻帆良学園に通う普通の高校生だよ。」

「ん？麻帆良学園？それじゃ後頭部の長い爺が学園長じゃない？」

「あれっ？そうだけどルイズは知っているのか？」

「もちろん。あの人も魔法使いよ！」

「な、なんだってー！それじゃあデスメガネとかも魔法使いだったりするのか？」

「デスメガネって誰よ？」

「高畑・T・タカミチだよ。先生と広域指導員をやってるぞ。」

「ははっ。タカミチは先生になったのね。私とアイツは知り合いよ。あと、麻帆良学園は魔法使いの拠点だから結構魔法使いはいるわよ。」

「俺の中の常識が壊れそうだよ」

その後も、ルイズと才人は様々な話で盛り上がった。ルイズにしても元の世界に帰ってからの時間軸のズレもあって科学技術の変化には驚いていた。才人の手持ちにあったノートパソコンを見てルイズは特に食いついた。

「コンピュータがここまで小さくなったんだ。しかも、絵も見れて音楽も聴けるなんて」

「あと、携帯電話もあるぞ。ほら。」

「ええっ！電話もこんなに小さくなったの！向こうの進歩は早いのは知っていたけどここまでとは思っても居なかったわ。」

・ ・ ・ ・

しばらくして日がくれて月が姿を表した。地球とは違い2つある月を見て才人はポツリと言葉を漏らした。

「そっか 本当に異世界に来たんだなあ。」

「ごめんなさい、才人。こんなことに巻き込んでしまつて。」

「別にいいよ。事故だったんだし、それよりもこれからよろしくな。」

「ありがとう。こちらこそ宜しく。」

この二人が完全な信頼関係を結ぶのはそう遠くないことなのかもしれない

第2話 Welcome to Fantasy World (後書き)

ルイズと才人の間の距離感のとり方が難しいです。

原作とは違いルイズはだいぶ進歩しているのでこのようにしてみました。

ただ、ツンデレ成分をどうしようかと悩み中です…

次回の投稿は1週間から1ヶ月後です。

第3話 神の盾（前書き）

遅くなりすみません。二ヶ月ぶりの最新話です。

第3話 神の盾

第3話 神の盾

夜が明け朝日が部屋に差し始めたときに才人はルイズよりも一足先に目覚めた。昨晩はルイズが所持していた寝袋を使って彼は眠りについていた。

そういつた状況になってしまったのはルイズが決して才人を蔑ろにしていたわけではない。二人共話しに夢中になっていた故に就寝直前までベッドの数が足りないことに気がつかなかったのだ。早いうちに気がついていたら彼の寝床にはちゃんとしたベッドが用意されていただろう。

ルイズ自身は紅き翼で旅をしていた頃に寝袋は慣れていたことと、事故とはいえ本人の同意なく無理やり才人をハルケギニアへと召喚してしまつた後ろめたさにより、最初のうちは彼女が寝袋を使うことを主張していた。

だが、流石に女の子に譲られる訳にはいかないとサイトが固辞し、若干の言い争いの後に結局はルイズが折れて彼女がベッドを使いサイトが寝袋で寝ることに決まつたのであつた。

目が覚めた才人は最初のうちは寝ぼけてぼーっとしていたが、しばらくした後には周りを見渡して昨日起こつたことを思い出した。

「夢じゃない。俺は本当に異世界に来てしまつたんだな。」

そうつぶやいた時、彼のつぶやきに反応したかのようにベッドで寝ていたルイズも目が覚め急に起き上がった。

荒場も切り抜けた経験のある彼女は人の気配などには敏感である。いつもの朝とは違いサイトの声を聞いて無意識のうちに目が覚めた

のだ。

ただ、杖を才人の目の前に突きつける思いっきり戦闘態勢だったのはご愛嬌だろう。昨日のことを思い出し問題がないことを確認したルイズは何事もなかったように氷のように固まっている才人に話しかけた。

「そういえば昨日貴方を召喚したのだったわね。おはよう。」

「お、おはよう。いきなり起きてどうしたんだ？」

気を撮り直した才人はルイズに先ほどの行動の理由を尋ねる。

「ただ、人の動きを感じて目が覚めただけよ。」

「どこの仕事人だよ。」

「ああ、あれね。面白かったわ。」

「って 知っているのか。」

ルイズの答えを聞いて有名な日本のテレビ番組を思い出した才人は思わず口に出してつぶやいたが、ルイズが知っている反応を返していたため思わず驚いた。

「あの作品は詠春が薦めたから観てみたのだけど、つい当時放映していたシリーズはすべて制覇したわ。それにしてもこの世界の娯楽は少なすぎるわ。向こうの世界から色々を持ち込んでいなかったら退屈していたでしょうね。」

「へえー。どんなものを持ち込んだんだ？」

他にどんなものを知っているのか気になり彼女に問いかける。

「まず、シエイクスピアのような古典文学は持ち込んだわ。結構この世界に近いものがあるから親しみやすいのよ。あとは」

「いや、言わなくていいぞ。」

ルイズが次々に述べる聞き覚えのない作品名を聞いて才人は思わず辟易した。普通の小説ですら滅多に読まない才人にとっては古典文学の題名を聞くだけで知恵熱が出そうである。その表情を見てルイズは溜息をつきこの話題を打ち切った。

ひと通りの身支度を終えて部屋でくつろいでいた時に、ルイズは昨日のうちに済ませていなかったあることをふと思い出し才人に話しかけた。

「そういえば才人。貴方に刻まれたルーンを見ていなかったわ。ちよつと見せなさい。」

「ん？ルーンってなんだ？」

「それも話していなかったわね。先に説明するわ。」

才人の間の抜けた表情を見て彼に説明を済ませることを失念していたことに気がついたルイズは、ルーンを観察する前に使い魔のルーンに関するひと通りの知識について話した。

「へえ〜。なんだか便利そうだな。」

「そうよ。これから先、どのように役に立つのか早く知っておきたいからルーンを見せてくれないかしら？」

「ああ。いいぜ。」

才人の許可を得てうきうきしながら彼のルーンの観察を始めた。ところが次第に顔を強ばらせ急に立ち上がり棚の書物を次々とひっくり返し始めた。

「お、おい。いきなりどうしたんだ？急に立ち上がったりなんかして」

「いいから黙っていなさい！！」

「はい。」

才人はルイズの様子が急激に変化したのを見てどうしたのかと理由を訪ねてみようとしたが、気迫のこもった表情で言い返され事が済むまでただ呆然と彼女の作業を見ているしかなかった。

しばらく経って彼女は以前にある書籍を調べたときに書き留めていた羊皮紙を見つけ出した。それを手にとり、才人の手の甲のルーンと羊皮紙に描かれたルーンを見比べてその2つが一致することを確認したルイズは堪え切れなくなり叫んだ。

「あゝもう！厄介な面倒事はいや〜！」

ルイズが手にしていた羊皮紙に描かれていたルーンのそばにはそ

のルーンが意味する説明文が書かれていた。

【神の左手ガンダールヴ】と

ハルケギニアに於いて、ブリミル教とは絶対唯一の宗教・権威である。今から6000年ほど前に、始祖ブリミルがハルケギニアに魔法を広めたことにより、現代のハルケギニア社会が形作られたと言っても過言ではない。その後、弟子たちがブリミル教を作り広めたのだが詳細は割愛させてもらおう。

何はともあれ、このハルケギニアの始祖にまつわる一部の者はある歌が伝わっている。

【神の左手ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。左に握った大剣と、右に握んだ長槍で、導きし我を守りきる。】

【神の右手はヴィンダールヴ。心優しき神の笛。あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空。】

【神の頭脳はミヨズニトニルン。知恵のかたまり神の本。あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に助言を呈す。】

【そして最後にもう一人……。記すことさえはばかれる……。】

ガンダールヴ、ヴィンダールヴ、ミヨズニトニルンについてはその能力を指し示している。だが、最後の一人についてはほんのひとにぎりのものしか知らないだろう。それこそ、ハルケギニアの闇に潜むもの以外

そもそも、始祖ブリミルは崇められておりハルケギニアでは彼のことを知らない者は皆無と言っても等しいだろう。ところが、ブリミルの使い魔の話になると知っているものは激減する。ロマリアの宗教庁の神官でさえもとに調べていなければ名前すら覚えていないだろう。アカデミーのような始祖について研究している者はさすがに知っているが先ほどの歌のような情報までは知らない。大切なのはブリミルであり彼の使い魔については二の次になっていたのである。使い魔のルーンなどほとんど気にとめてはおらず、せいぜい彼らの活躍を知るぐらいだろう。

使い魔のルーンを見て才人がガンダールヴであるとルイズが気がついたのは、彼女が既に学院の書物を風潰しに調べつくしていたからである。既に”魔女”としてその名が知られている彼女は、教師のみが閲覧を許されている『フェニアのライブラリー』の閲覧許可を学院長からもらうことが出来た。最近は時間が空いているときにそこに保管されている本を読み進めているのである。さりげなく彼女の隣には青い髪の少女もいるのは公然の秘密である。

話がそれかけたが、ルイズはハルケギニアに帰還してから自分の系統についてはまっさきに考察していた。ハルケギニアの魔法は何時迄経っても成功してはいない。一般に広まっている系統魔法が使えないのであればもしかすると　？　と思ひ虚無に関する事柄はメモをとっていた。

何はともあれ、ルイズの魔法が知られたらトリステインだけではなくロマリアなどの周辺国を巻き込んだ大騒動になるのは眼に見えている。紅き翼に染まったとはいえ基本的に厄介事は好まない彼女にとって由々しき事である。取り敢えずは目の前に座っている必然的に巻き込まれることが決まってしまった彼に説明をしようとした。しかし、何も基礎知識がない状態で色々詳しいことを言われたので1回で理解するのはさすがに無理であったのだろう。

「なるほど。ほとんど分かん。」

そう、才人が虚無について簡単に説明を受けたとき近くでズシャ

「と転がっている桃色の髪を持つ少女がいたそうだ。」

「おはよう。ルイズ。　　って貴方何やっているのよ？」

キュルケがルイズに話しかけた時の第一声は、呆れたように見せつつも笑いを堪えているのがバレバレな声だった。偶々ルイズの部屋の前を通りかかったときに部屋の中から大きな物音が聞こえて中の様子を見たら綺麗に床の上に滑っているルイズがいたのだから無理もない。

ルイズは埃を払いつつ、恨めしそうに返事を返した。

「おはよう。キュルケ。何よ文句ある!？」

キュルケは噛み付きそうなルイズをどうどうと抑えて、側にいた才人に気がついた。

「貴方の使い魔って、彼？　平凡そうだね。」

「平凡って「ええ、何もとりえのない普通の少年よ。」」

才人はバカにされたと思ひ反論しようとするも、ルイズからの追撃を受け撃沈した。精神面は豆腐のように脆いようだ。才人の様子を見てキュルケは補足を加える。

「別に貴方のことを悪くは言っていないわよ。ただ、”あの”ルイズが呼び出したのが普通の人間だったことに驚いたのよ。それはともかく貴方、そんなにゆっくりしていいの？もうすぐ朝食の時間よ。」

キュルケからの忠告を聞き、ルイズは慌てだした。

「!?! いけない!　着替えるのを忘れていたわ。悪いけど才人を厨房の方に案内してもらえない?　流石に貴族用の食堂では厄介

事が起こるから。」

「才人？ ああ、彼の名前ね。確かに余計ないざござは避けたいわね。わかったわ。」

「才人。悪いけどキュルケに付いて行って先に朝食をとって頂戴。後から私も行くわ。」

「ああ。わかったよ。」

何が厄介なのかはわからなかったが、ルイズの言われたようにキュルケについていくことを了承した。

才人はキュルケと共に厨房の方へと向かっていた。因みにキュルケの使い魔であるサラマンダーのフレイムも後ろに付いていた。二人は歩きながらもお互いについて軽く自己紹介をしていた。

「へえ。貴方は以前にルイズが行った世界から召喚されたのね。」

見たことの無い服を着ているし本当みたいね。」

「はあ。どうやらそうみたいだな。まだそんなに実感はないけどな。」

納得したような表情をしているキュルケであるが、一方の才人は曖昧に相槌をうっていた。

「仕方が無いかもしれないけど、早く慣れたほうがいいわよ。」

「ん？ どういう事だ？」

先ほどとは違って変わって真剣な表情をしたキュルケを見て彼は聞き直した。

「私のように普通の平民に友好的な貴族は居ないのよ。私はルイズから色々話を聞いているから下らないプライドや偏見は持っては

居ないけど、ほとんどの貴族は違いわ。特にここトリスティンの貴族はね。」

「身分の差がはっきりとしているのか？」

「と言うよりも貴族と平民の間に絶対的な壁があるのよ。魔法の力を持つ貴族に平民は絶対に逆らえない。これがこの世界の常識よ。私やルイズ、タバサ、多分後で会うわ、は兎も角、他の貴族の前でそんな態度じゃ駄目よ。」

キュルケの話聞き面倒だなど思いつつもそれほど深刻には捉えずに才人は話を聞いていた。

第3話 神の盾（後書き）

しまった。自動投稿で更新してしまった。あとで、改稿します。

> 7 / 26 01 : 50 <

後半部分を追記しました。

第4話 Nothingness (2011・10・18 統合完了) (前書き

(前回のあらすじ)

一晩が経ち、ルイズは才人がガンダールヴであると気がつく。一方、ぴんと来ていない才人はキュルケに連れられて厨房へ向かう。

才人はキュルケに案内されて食堂の裏の厨房にたどり着いた。丁度朝食を準備しているために忙しいのか多くのコックやメイドたちが慌ただしく動き廻り料理に専念している。

キュルケはあたりを見渡して近くに通りかかった黒髪のメイドに声をかけた。

「ちよつと貴方。」

「おはようございます、ミス・ツエルプストー。どうかなさいましたか？」

「彼に食事を出して。それと後でルイズも来るからその分も頼むわ。」

「はい。判りました。」

「それじゃ才人。また後で会いましょ。」

手をひらひらと振ってキュルケは直ぐに厨房から立ち去った。あっさりとした話が進んでいたのも、才人はしばらくの間ぼけっと立ち尽くしていたが腹の音がなったことでハッと我に返った。側には先程話しかけられたメイドがクスクスと笑っていて、彼の顔は気恥ずかしさで真っ赤になった。

「ちよつと待っててください。何か食べるものを持ってきますから。」

彼女からの申し出に才人は空腹感と羞恥心で只々頷くしかなかった。

厨房にある空いている席に案内された才人は、先ほどのメイド、シエスタと身の上話をしながら彼は先に朝食をとっていた。どうやら才人のことはこの学園で働く平民達の間でも話題になっていたようだ。

「おはよう。あらっ？シエスタが才人の世話をしてくれていたのね。」

丁度一通り話し終えたところにルイズが厨房に入ってきた。

旧世界、新世界の様々な料理に触れたルイズは学園の単調な料理に飽きて度々厨房に訪れて食事をとっていた。特に朝食は重たく脂っこい食事を避けるために必ずと言っていいほどここで摂っていた。当初はそんなルイズに対して厨房の面々は懐疑的に思っていたがルイズから提供されたレシピ等などの交流によってすっかり溶け込んでいる。

「おはようございます、師匠。」

「厨房にいるときにはそんな語つ苦しい呼び方じゃなくてルイズでいいっていつも言っているのに……」

「いえ、師匠を尊敬しているからこそこう呼ばせていただいていますから。」

ルイズはシエスタからこのような場で師匠と呼ばれることに対して照れ隠したような表情をしていた。

「ん？師匠ってルイズはシエスタに何を教えているんだ？」

「そういえばまだ言っていないかったわね。私は京都神鳴流と呼ばれる剣術の流派を修めているのよ。ちょっとした縁でシエスタに剣術の指導をしているの。」

二人の会話を聞いて疑問に思ったのか才人から尋ねられたルイズはサラッと理由を答えた。ルイズが言った流派に聞き覚えがあるのか思い出そうと考え込んでいた。

「うん。どこかで聞いたことがあるような……」

「ああ、それなら一応神鳴流は表でも活動しているからテレビか何

かで知ったのじゃないの。」

「え？表って…？」

ルイズが言った表と言う言葉に対して才人は裏社会を連想し、この予想が当たっていないことを祈り恐る恐る聞き返した。

「ええ、表向きは普通の剣術の流派として活動しているけど裏では退魔士として活動しているのよ。あつ、そろそろ急がないと授業に遅れるわ。さっさと朝食を済ませましょう。細かいことは後で説明するわ。」

授業開始時間が迫っていることに気がついたルイズ達は会話を切り上げて朝食を採り終えた。そして、教室へ向かう道すがらルイズは才人にあることを告げた。

「教室では黙って静かにしていてね。本当は才人を連れていきたいんだけどね。連れて行かないと後で厄介なことが起きかねないから。」

その言葉の意味がわからず才人は疑問を感じたが、取り敢えずはうなづいておくのであった。

「なあ、ルイズ。なんで俺まで掃除しているんだ？」

あれから数刻後、瓦礫が散乱する教室で箒を手にとって掃いている才人はルイズに対して尋ねていた。ただし、この時の才人はまるで検察官のような剣幕を持つ雰囲気を漂わせていた。

「と、当然じゃない！ 使い魔と主人は一心同体なんだから。」

「誤魔化すなよ！ 大体お前があんなコトしなかつたらこんなことにならずに済んだんだ！」

さつきまで行われた授業では錬金についての講義が行われていた。生徒に実践させようとした際に担当のシュヴルーズ先生が指名したのはルイズであった。その時爆発魔法を知っている周囲はざわめついていたが、何も知らない先生と才人は周りの様子を不思議に思っていた。指名されたルイズはどうせなら才人に爆発魔法のことを見せておいたほうがいいわねと思いきやあまり考えずに魔法を行使し、うっかり防衛魔法のことを忘れていたため教室が大惨事となり、罰として片付けがメイジられたわけである。

「悪かったわよ。でも、魔法について少しは実感した？」

「そりゃ身を持って実感したけど、魔法って全部があんなに凶暴なものなのか？」

ルイズから感想を聞かれて、先ほどの爆発を思い出し顔色を悪くし才人は答えた。彼女は”少し”やりすぎたかなと思いつつ訂正するように話しかけた。

「全部が全部あんなものじゃないわよ。治療に使われる水魔法のようないろいろな魔法があるのよ。むしろ、何でもかんでもが爆発する私の魔法が特殊なのよ。」

「ふーん。そういうものなのか。」

「あつそうそう。私はこれから行く所があるから先に厨房に行つてなさい。丁度お昼になった頃だしね。」

「そんじゃ。腹も減ったことだし先に行つてくるとするか。」

急いで厨房に向かう才人を見送って、ルイズは呟きながらある学院長室へ歩き始めた。

「暢気でいいわね。いつまでこんな生活が出来るかしら……」

そうつぶやいた時のルイズの表情は単なる少女の顔ではなく歴戦を経験した物の表情であった。

一方、ルイズが訪れる前に学院長室でも事態が進んでいた。

丁度午前の授業が始まった頃、学院長であるオールド・オスマンは秘書であるミス・ロングビルにセクハラ三昧で楽しんでた。しかし、突然やってきたコルベールが差し出した本のタイトルから事は重大なものであると判断し彼女を外し彼から話を聞き始めていた。「ルイズが召喚した使い魔はガンダールヴである」という推測である。コルベールから話を聴き終え、オスマンは今後の対応について思案していた。

（まったく、頭の痛い話じあの。本当かどうかはまだ判断できんが阿呆な輩への対応を考えると胃が痛くなるわい。）

そうしてどうしようか考えていたその時、部屋のドアがノックされた。

「誰じゃ？」

「ルイズ・ラ・ヴァリエールです、学院長。私の使い魔についてお話があるのでお時間をいただけませんか？」

扉の向こうにいるのは、丁度話題の中心の一人である生徒である。（ほう、さすがは”トリステインの賢者”といったところかの。早速気付きおったか。）

彼女についての噂を聞いていたオスマンは彼女も既にコルベールと同じ結論に至ったと判断し、彼女を交えて話をするべきだと結論づけ、入室を許可した。

「構わん。入って来なさい。」

「失礼致します……っ？ あら、コルベール先生もいらっしやったのですか。お二人の様子だとガンダールヴについては既に知っているようですね。」

入室してオスマンとコルベールが真剣な話をしていたことから、早々ルイズは自分が話そうとしていたことの”一つ”について既に

話しているだろうと推測した。そしてそれは正しい。ただ、ルイズの様子にオスマンはある疑問が思い浮かんだ。

（”ガンダールヴについて” はじゃと？ この他にも何かあるのか。ガンダールヴ、始祖の使い魔、虚無の使い魔……まさか！？）

オスマンはあることに気が付きその事実の重大さに震えた。下手すればトリステインだけではなくロマリアといったハルケギニア各国を巻き込んだ大騒動が起こる可能性が高いことに。オスマンの様子を見てルイズは話を続けた。

「流石、学院長ですね。その様子だと気がついたようですね。」

「ミス・ヴァリエール、一体どういう事でしょうか？」

未だにガンダールヴの先に気がついていないコルベールは二人の様子に疑問を持っていた。ルイズはコルベールも巻き込んでいいかどうか一瞬迷ったがガンダールヴのことを知っているのならいづれは同じ結論にたどり着くと判断し、答えを言った。

「私の使い魔である平賀才人はほぼ間違いなくガンダールヴでしょう。そうなるかと今までわからなかった私の魔法系統もほぼ決まりません。そう、私の魔法は”虚無”です。」

答えを言い終えた瞬間、室内は音一つもないように静まり返った。オスマンが話を切りだそうとしたその時、ドアがノックされた。

それは、今さっき話題に出た才人が決闘に巻き込まれたという知らせだった。

第4話 Nothingness (2011・10・18 統合完了) (後書き)

シエスタ魔改造な予感…

どうしてこうなった

2011/09/19 02:04 追記

この話のタイトルを変更しました。

2011・10・18 話を統合

今後の方針

作者の mid - arc です。

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今後の掲載予定について話をさせて頂きます。

【改訂作業】

現在、小説の質を高めるために改訂作業を進めています。

現時点では第1話の改訂が終了しました。

第2話以降については今後改訂を進めていきます。

(特に第2話について私自身が描写が足りていないなど感じています。)

【次話の掲載について】

出来れば今月中の掲載を目指していますが、遅れることもありま
るのでその時はご容赦ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2292t/>

虚無<ゼロ>の翼

2011年10月18日01時57分発行